

第67歩

「田井の子供神相撲」

今年も、9月23日の秋分の日、牟礼町田井の子供神相撲が長い歴史を持つ名刹六萬寺に奉納されました。この田井の子供神相撲、実に千年以上の歴史を有する伝統行事です。源平合戦の屋島の戦いの前には、平家が六萬寺に行在所を構えており、そこに来られた幼帝安徳天皇を慰めるために催されたという逸話も残っています。もちろん本市の無形民俗文化財に指定されていますし、平成29年には、公益社団法人日本ユネスコ協会連盟の「プロジェクト未来遺産」として登録がなされています。このような「無形」の文化財を後世に受け継いでいくことは、目に見える物として受け継がれる建造物や美術品など「有形」の文化財とは異なる重みと難しさを持っています。しかも、田井の子供神相撲のように千年もの時を超えて受け継がれるその価値は、無形の伝統が持つ生命力の証であり、地域の誇りでもあります。

なぜ、無形の文化財の継承が困難なのでしょう。舞台芸術や祭礼行事は、人から人へと直接伝えられるものだからです。そのため、担い手の減少や生活様式の変化によって、簡単に途絶してしまう危うさをはらんでいます。歌舞伎にしても同様に、舞台上で演じ、観客と呼吸を合わせる瞬間の積み重ねこそが伝統を支えています。単なる技術の継承にとどまらず、所作の意味や心構えまで含めて次代に伝えていかなければ、本当の文化継承とは言えないのです。無形の文化財は、過去から現在へ、そして未来へと人を介してしか伝わらない儚さを宿しているとも言えましょう。だからこそ、そこにかける人々の熱意と覚悟が何よりも重要なのです。近年話題を呼んでいる映画「国宝」は、そのような文化の核心の部分に光を当てています。子供神相撲のように地域社会に根差し、次の世代の子供たちが体験を通して参加できる形を維持することは、文化を「生きたもの」として存続させる最良の方法でしょう。映画「国宝」が映す伝統の光と、現実に地域で受け継がれる祭礼の所作。この二つを結びつけながら、無形の文化財の継承の難しさと大切さを私たちは改めて心に刻むべきではないでしょうか。

